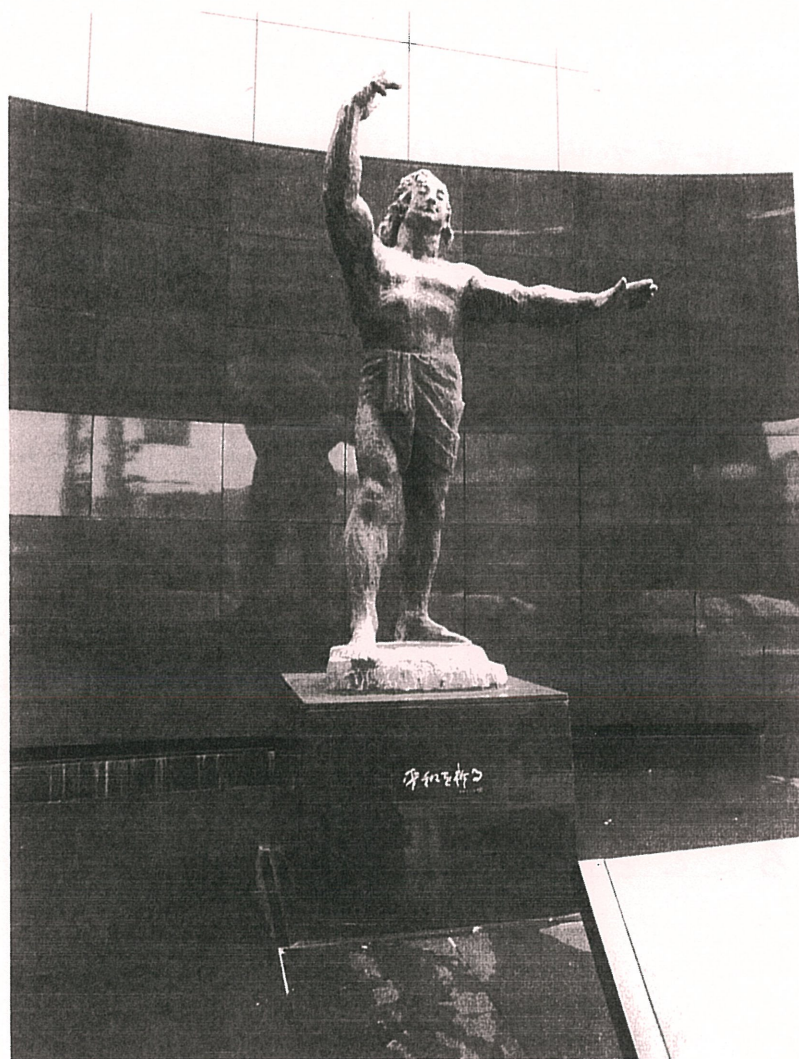


板橋区平和都市宣言記念事業  
令和4年度 板橋区中学生平和の旅  
感想文集



板橋区役所正面玄関前 平和祈念像／北村西望 作

板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会  
( 板 橋 区 ・ 板 橋 区 議 会 )

## 板橋区平和都市宣言

世界の恒久平和を実現することは 人類共通の願いである  
しかるに 現実には 核軍拡競争が激化の様相を示し 人類  
の滅亡さえ危惧されるところである

われわれは 世界で唯一の核被爆国民として また 日本  
国憲法の精神からも再び広島 長崎の惨禍を絶対繰り返して  
はならないことを強く全世界の人々に訴え 世界平和実現の  
ために 積極的な役割を果たさなければならない

板橋区及び板橋区民は 憲法に高く掲げられた恒久平和主  
義の理念に基づき緑豊かな文化的なまちづくりを目指すとし  
ても 非核三原則を堅持し 核兵器の廃絶を全世界に訴え  
平和都市となることを宣言する

昭和60年1月1日

板橋区

## ごあいさつ

---

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

「中学生平和の旅」は、『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』ことを目的に実施しており、今年度は3年ぶりに被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各11名、計22名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだ貴重な経験と、現地で感じたそれぞれの「平和への想い」を自分自身の言葉で綴ったものです。

戦後77年が経過した現在、世界にはいまだ多くの核兵器が存在し、新たな兵器の開発も進められています。また、地域紛争やテロ行為などにより、多くの尊い命が奪われています。戦争による悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけにしていいただければ幸いです。

板橋区は、「SDGs 未来都市」として、全ての国が取り組むべき普遍的な目標であるSDGs（持続可能な開発目標）の理念を見据えつつ、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

令和4年11月

板橋区長

坂本 健





## 目次

ごあいさつ	1
第1部 中学生広島平和の旅	
1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6
第2部 中学生長崎平和の旅	
1. 行程表	18
2. 団長感想文	19
3. 参加中学生感想文	20
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	33
(2) 平和宣言	36
(3) 平和への誓い	40
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第	43
(2) 長崎平和宣言	48
(3) 平和への誓い	52

### ■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

茂野 善之	議員	杉田 ひろし	議員
大田 ひろし	議員	山内 えり	議員
五十嵐 やす子	議員		



# 第1部

## 第26回 中学生広島平和の旅



原爆ドーム前にて

### 参加生徒

板橋第一中学校 谷口 ころろ

志村第四中学校 今井 翼大

赤塚第一中学校 村井 初

板橋第三中学校 森田 心

西台中学校 星 慶達

赤塚第三中学校 小向 日向

加賀中学校 千ヶ崎 ゆり

上板橋第一中学校 其部 優希

高島第二中学校 黒田 彩水

志村第一中学校 溝口 芽生

上板橋第三中学校 糸井 遥人

### 引率者

志村第一中学校

長田 洋幸校長(団長)

久間木 純教諭(指導員)

久保 勇人教諭(指導員)

### 学習指導

志村第一中学校

奥住 智望教諭(指導員)

## 中学生広島平和の旅 行程表

実施期間 令和4年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日(金)

時 間	行 動 内 容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:20	板橋区役所 発
8:00	東京駅 着
8:30	東京駅 発
12:30	広島駅 着
12:40	広島駅 発(市電)
13:00	広島市役所 着
13:10	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
13:30～17:00	★開会式(開会挨拶、参加自治体紹介) ★平和学習会(被爆体験講話、ワークショップ、発表) ★閉会式(講評)
17:30	ホテル 着
19:00	夕食
22:00	就寝

8月6日(土)

時 間	行 動 内 容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル 発(徒歩)
7:10	平和記念公園 着
8:00～9:00	平和式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル 着
15:30～17:30	学習会
17:40	灯籠流し見学
19:00	夕食
22:00	就寝

8月7日(日)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発(観光バス)
8:30	平和記念公園 着(公園内見学、献花、折鶴奉納)
9:30～11:00	平和記念資料館等見学
11:30	平和記念公園 発(観光バス)
11:50	広島駅 着
12:40	広島駅 発
16:30	東京駅 着
17:20	板橋区役所着・解散式

★はヒロシマ青少年平和の集い事業(広島市主催)



# 「伝承」することの大切さ

第26回中学生広島平和の旅  
団 長 長 田 洋 幸  
(志村第一中学校)

新型コロナウイルスの感染防止のために中止になっていた「中学生広島平和の旅」が、3年ぶりに開催されました。11名の各校代表生徒とともに旅をする中で、改めて「戦争の恐ろしさ」や「平和の尊さ」を実感してきました。戦後77年が過ぎ、戦争体験者の方々の高齢化による「今後の伝承」が課題となっています。8月6日の「平和記念式典」の中で、地元の小学生が次のように語っていました。

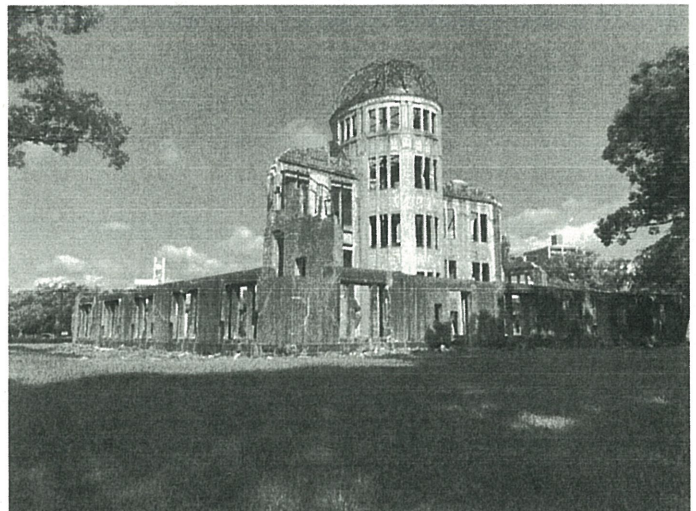
## 「平和への誓い」(一部抜粋)

過去に起こったことを変えることはできません。  
しかし、未来は創ることができます。  
悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。  
被爆者の声を聞き、思いを想像すること。  
その思いをたくさんの人に伝えること。  
そして、自分も周りの人も大切に、互いに助け合うこと。  
世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。

小学生2名が世界に向けて力強く発信している姿がとても印象に残りました。戦争による被害等を知識として理解することも大切です。しかし、その事実と合わせて、戦争経験者の思いを理解し、想像し、今何ができるのかを考えて伝えていくことが重要であり、それが「伝承」なのだと思います。

今回この旅に参加した11名の生徒たちは、「伝承」への意欲にあふれ、学習会の中で、「多くの人に伝えたい」「その場面がもっとないかなあ」などと、熱く議論している姿に頼もしさを感じました。生徒たちが今後もこの気持ちを持ち続けて「伝承」してくれることを願うと同時に、その思いを実現するための環境作りをしてあげたいと自分自身の責務として感じた旅となりました。





# ヒロシマに学ぶ

板橋第一中学校 8年 谷口 ころろ

私たちは、8月5日から7日にかけて広島を訪れた。私は広島に行く前は戦争について、ほとんど知らなかった。

広島に着いたばかりのとき、私は原爆ドームを見てもここに原爆が落とされたことにあまり実感が湧かなかった。そんなことがわからないほどきれいな街並みだったからだ。今歩いているこの場所が77年前焼け野原になっていたと思うと、とても不思議な感じがした。

ヒロシマ青少年平和の集いでは、原爆の概要説明や、被爆者の山本玲子さんのお話を聞いた。山本さんは、「戦争をしても何もいいことはありません。命だけは大切にしてください。」と強く訴えていた。戦争の恐ろしさを誰よりもよく知っている山本さんが訴えることで、何か強く感じるものがあった。グループディスカッションでは、「被爆者の思いを受け継ぐ方法」について話し合った。「SNSを利用して被爆者の思いを発信する」という意見が多く出て、その時代に合った方法で伝えていくことで若い世代にも知ってもらうことが大切だと思った。

平和祈念式典は多くの人出席していて、厳かな雰囲気にも包まれていた。8時15分になると、私たちは黙祷をした。誰一人言葉を発さず、沈黙の1分間が流れていた。夜になって川まで歩くと、数え切れないほどの灯籠が流れていて、沢山の人が灯籠を見に来ていた。昼間とは別の景色を見ているようで、とてもきれいだった。私はそこで、その1つ1つの灯籠に平和への願いが込められていて、こんなにも多くの人々が平和な世界を望んでいることを知った。

平和記念資料館には、被爆した人の写真や絵、被爆したものがたくさん展示されていた。私は展示されている写真と、この旅で見た広島の景色や経験を照らし合わせながら観賞していた。着いたときはここで戦争が起きたことに実感が湧かなかった私だったが、写真を見ているうちに、段々と「本当にあったことなのだ」と、現実を受け止められるようになってきた。その写真の中には痛々しく目をそむけたくなるものも多くあった。私は、とても怖くなった。事前に原爆については調べていたし、山本さんのお話も聞いていたので、原爆の怖さを十分知ったつもりになっていたが、写真を見て現実を知ることによって、改めて戦争に対して恐怖を覚えた。写真の中で一番印象的だったのは、泣いている女性の写真である。どんな悲惨な写真よりも、私にはその写真が戦争の残酷さを訴えているように感じた。

私はこの旅を通して、平和に暮らせることは当たり前なことではないと痛感した。今まで当たり前過ぎて気づくことができなかったが、私たちの暮らしは「平和」で、たくさんの人に守られているのだと、家に帰って少しわかった気がする。

また、戦争の怖さを目の当たりにすることによって、これから後世に伝えていかなければいけないという思いが明確になった。

私は今まで、「平和」という言葉に抽象的なイメージしかなかった。しかし、そばにある、この日々が、平和そのものであると気づいた。このとき感じた気持ちを一生忘れず、「平和」の意味を大切にしていきたい。そして、今世界で起きている戦争が少しでも早く収まることを願っている。

# 過去の過ちを継承して平和を願い続ける

板橋第三中学校 8年 森田 心

家族、友達、先生、親戚、大切な人が私たちにはいます。そんな人たちと一緒に日々を暮らすこと。これがどれだけ幸せで、薄く脆いものか。

77年前の1945年、昭和20年8月6日8時15分、広島に原子爆弾が一発投下されました。大きな爆発音、熱線、爆風によって広島の街は一瞬にして色を失い、地獄絵図に変化しました。

「怖い、苦しそう、可哀想」本を読んだときや、写真を見たりしていたときはそのように感じていました。しかし、現地に行くとそんな単純な感情だけでは済ませることができないと私は感じました。

平和の旅の初日。私たちは「青少年平和の集い」に参加しました。そこで私たちは被爆者の方の体験講話、原爆の被害の概要を聞きました。被爆者の体験講話では最後の「戦争は二度と起こさないでください、命は大切にしてください」という言葉が被爆者からの思いとして印象に残りました。

平和の旅の2日目。「平和祈念式典」に参列しました。朝から蒸し暑く、蝉の声、人々のにぎやかな声をはじめとした日常的な雰囲気にも包まれていました。8時15分の黙とうのとき、原爆投下により、日常的な雰囲気が一瞬にして沈黙に一変したことを想像させられました。そしてこの時私はこれこそが戦争の悲惨さ、周りで話す人もいなくなり、寂しさや絶望の現実を突きつけられたのだと思い、切なく、どん底に落とされたような気持ちになりました。

平和の旅の3日目。「折り鶴の奉納と献花」、「平和記念資料館」の見学を行いました。折り鶴の奉納と献花では、死没者への哀悼の意と恒久平和を願いました。平和記念資料館の見学ではいくつもの驚きの光景を目にしました。ぼろぼろの服、焼け焦げたお弁当、更には放射線による体のいたるところへの血の斑点、熱線による大火傷、ただれた人の皮膚など、背筋が凍りつくようなものが多く展示されていました。これを見て自分の周りの人がこうなったら、自分がこうなったらと恐ろしさと本当の地獄の想像が頭に浮かび上がったのと同時に言葉では言い表せないほどの絶望も感じました。しかし、広島を絶望しながらも復興させた人の真の強さというものも感じられました。

この3日間を通して、私は戦争がどれだけ愚かで良くないものかを感じ、世界中の人々が握りしめた拳を広げて手をつなぐことが大切であると思いました。そして、私たち自身が戦争の歴史を継承し、これから先の未来へ平和を願い、求め続けて、はじめて幸せが厚く堅いものの上になると思っています。そのために私たちは一人ひとりがそのような平和への声をあげていくことが重要だと思っています。





# 広島で感じたこと

加賀中学校 8年 千ヶ崎 ゆり

77年前、一瞬にして沢山の尊い命が失われ、地獄と化した場所、広島。実際に足を運んでみることで、沢山の事を学び、感じ、考えることができたが、色々な事実を目の当たりにし、釈然としない気持ちになった。

平和の旅1日目。目の前に広がった景色は東京とあまり変わらず、賑わう町並みに本当に原子爆弾が投下された場所なのか疑うほどだった。「ヒロシマ青少年平和のつどい」では、正直一発目から衝撃的だった。もうご高齢なのに多くの人に伝えたいという一心からより詳しく、一言一言を丁寧に真剣に語る被爆者の方の姿。まるで私も体験しているような気持ちになった。ネットでも、本でもなく、被爆者本人に直接話を伺うことの大切さを改めて感じる事ができた。ディスカッションでは、地域による平和に関する学習の違いに驚いた。参加していた地域だけでも、学習時間や扱いやすい題材がまったくちがうのだ。勿論地元で起こった事をより深く知る事も大切かもしれない。しかし、大切なことなのに、地域によって知識の差があることに、私は少し違和感を感じた。

平和の旅2日目。『平和祈念式典』に参列した。式典開始から15分後の8時15分。原爆が投下された時刻となり、平和の鐘を合図に、黙祷が行われた。目を瞑ると、あの日と同じように蝉の声だけが響き渡っていて、今も昔もあまり変わっていないのだなと実感した。変わっていないからこそ、当時のことが身近に感じられ、とても恐ろしく感じた。だからこそ、戦争反対、と心から願った1分間であったし、私だけでなく、会場にいる人、離れている人までもが一体となって平和を願う大切な時間であったと思ったと同時に、もっと沢山の人がこの思いを届けて、一緒に願ってほしい。そう思った1分間でもあった。

平和の旅3日目。「平和記念資料館」を見学した。今まで私の中で戦時中はとても昔の話、というイメージをもっていたが、私にとっても身近なものの展示が多く、実はとても最近あった出来事なのだと感じた。展示物の中には子供の遺品を展示してあるコーナーもあり、この子達一人一人に希望のある未来が待っているはずだったのだなと思うと胸が苦しくなった。どの展示物も、原爆の悲惨さをよりリアルに伝えていて、見るのも辛いものばかりだった。でも、これが現実であり、すべての人がこの出来事を深く知るべきだと強く感じた。

私は広島に行くまで、原爆を使って良かったと思っている人たちの意見も少しわかるような気がしていた。なぜなら、使用しなかったら諦めずに戦争を続けていたかもしれないと思ったからだ。しかし、そうではなかった。どのような理由でも人の命を粗末に扱うような真似はしてはいけないのだ。今回の旅を通して、大切な人を失い、日常が奪われる苦しみが一体どんなにつらいことなのか、世界中の人が理解するべきだと、強く感じた。手遅れになる前に行動していかなければならない。だから私は戦争がどれだけ悲惨なものか、多くの人にもっと詳しく知ってもらい、興味をもってほしい。そして声を大にして訴えていきたい。「核兵器反対」「戦争反対」と。



# 私の理想論

志村第一中学校 8年 溝口 芽生

ここの感情に名前をつけたくない。言葉が足りない。悲哀とも違う。困惑とも違う。恐怖でも憤慨でも決意でもない。その全てでありながら、どれでもないのだ。巧みに言葉を操ろうとも形容し難い、ただ湧き上がるこの熱い想いだけが、彼らと私を繋いでくれる気がする。

ヒロシマのまちは、普通の街だった。少し特殊なところといえば、路面電車が多く走っていることくらい。この空が、この地が、かつて火の海と化したとは信じられないほど、ありきたりな街だ。想像することなんて出来なかった。あまりにも現実味が無すぎて。だが、実際にその証拠をみれば嫌でも想像がついてしまう。焼けた衣類やむごたらしい状態の人々の写真など、撮影することすら憚られる強烈な展示の数々。目を背けてしまいたくなるが、そうすることはゆるされない気がした。足がその場に縫い付けられたように動かなかった。喉が詰まって声も出ない。脳内が霞がかって何も考えられなくて、これといった感想すら浮かばない。

実際に足を運んで見てみないとわからないだろう。戦争とはなにか。戦争とは、核兵器とは、紛れもなくただの蛮行なのである。本当に、誰かの命を奪っても正義を誇れるのだろうか。不思議でならない。「戦争なんてありえない」と、あらゆる人々が口を揃えて言えるのが当たり前でなければならないではないか。

話す人みんなが、平和を強く訴えていた。核兵器廃絶に向けて死力を尽くすと。大きな決意がこもっていた。この決意を忘れてはいけないと思った。世界情勢がどうだとか、核は抑止力だとか、難しいことを言う大人もいるのだろう。だがしかし、平和を諦めるのはいけないことだ。きっとそれは子供じみた理想論。それでも構わない。みんながその理想を掲げれば、もはやそれは現実になる。綺麗事を言いたい訳ではなく、あの地に赴いた人々みんなの心からの本音だ。全ての人にとっての日常が、生温い平和でなくてどうする。

この旅は、私に使命を与えた。この万感の思いと理想論を、少しでも多くの人と分かち合うことだ。

今ここに、ままならない世界に向けて、強く鋭い不戦の誓いを。

資料館のある展示の前に、高齢の女性と子供数人がいた。女性の孫と思しき子供たちが、展示を指差しながら彼女に質問をしている。「これはね…」彼女が話し始め、子供たちはじっと耳を澄ましていた。

# 次に伝える

志村第四中学校 8年 今井 巽大

私は、この『広島平和の旅』を通じて、戦争の悲惨さ、広島への被爆、そして平和の大切さを学びました。中でも、広島での被爆が一番心に残りました。

『青少年平和の集い』で、被爆体験者の山本さんのお話を伺いました。山本さんは原子爆弾が投下された日、まだ七歳で爆心地から約 4.1 km 離れていた小学校の校庭にいたそうです。そのときのお話を聞いて、私は背筋が凍りました。小学校の隣家の上にとてつもなく大きな火の玉があって、だんだん夕焼けのようになっていき、小学校に爆風が吹いたそうです。その爆風によって小学校の廊下の天井は全て落ち、ガラスの破片でけがをしていた子もいたそうです。七歳の時の記憶をこんなにはっきりと覚えているくらい衝撃的な出来事だったのだなとその時感じました。

また、爆心地周辺で起こったことを広島の学生参加者が発表していました。原子爆弾の爆心地となった島病院の上空 600m で爆発し、3000～4000 度もの高熱となり、一瞬にして広島を焼け野原にしたと言っていました。さらに、爆風と熱線だけでなく、建物に残った残留放射線、黒い雨となって降った放射線の影響もあって、投下された 1945 年の終わりの 4 ヶ月ほどで 14 万人もの方々が亡くなって、山本さんは、その時降った『黒い雨』に放射線が含まれていたことを 4 年後まで知らなかったそうです。

たった一発の原子爆弾によって何十万人の未来と人生が奪われてしまったことに、私は本当に心が強く締め付けられました。原爆資料館では、様々な資料を涙をこらえながら見ました。そうしないと泣いてしまうような、悲しいエピソードや写真が沢山あったからです。日常が一瞬にして失われて、こんなにひどいことになってしまうのかと、見ながらそう感じました。大事な人たちに会えなくなってしまったり、火傷や放射線による病気で苦しんだりし続ける、そんなことはもう二度と繰り返してはならないと思いました。

『広島平和祈念式典』に参加して、様々な方の平和への誓いを直接聞きました。こども代表の誓いで『世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。』というこの言葉を聞いて、自分の学んだことをより多くの人に伝えることも私の使命だと思いました。

被爆体験者である山本さんが『戦争は何も生まない』と言っていました。争いが起きても武力を持ち出さない解決方法を世界中が目指し、実現することで無駄に戦争を起こさせないことが、未来の平和につながっていくと思います。『広島平和の旅』に参加して、原子爆弾がもたらす影響について調べ、平和について考えている人が沢山いることを知りました。私もそのことを学んだ一人として、今回の旅で感じたこと、戦争で起こった広島への悲劇を風化させないこと、戦争を起こさせないことの大切さを後世に伝えていく努力をしていきたいです。



# 平和の尊さ

西台中学校 8年 星 慶達

僕は、広島平和の旅に参加して、今とはまったく違う広島の姿をたくさん学び、平和の大切さについてとてもよく考えました。僕達は、今の平和が当たり前と考えられるほど、平和な生活を送っています。ですが、この平和は当たり前と考えて良いものではありません。

1日目の「ヒロシマ青少年平和の集い」の被爆体験講話では、戦争が終わったとき「もうサイレンの音を聞かなくてよくなる。」と山本玲子さんはおっしゃっていました。山本さんは被爆した当時7歳でした。サイレンの音を聞くのが当たり前、サイレンの音に怯えながら過ごすのが当たり前になってしまっていた世の中に心が痛みました。今、ロシアの侵攻によってウクライナもサイレンが鳴るのが当たり前になってしまっています。そんな日々を送らないためにも、唯一の被爆国である日本から戦争の悲惨さ・平和の尊さを発信していくことが必要だと思います。また、グループディスカッションでは各地域から集まった生徒の人達と「被爆者の思いを受け継ぎ戦争の悲惨さを風化させないためにはどうするべきか」話し合い、身近なSNSの影響力を利用して様々な世代の人が、戦争について知るようになることが必要だと考えました。この知識を日本だけに留めずに、海外にも発信していくことで世界中の平和に繋がるのではないかと考えました。

2日目は「平和祈念式典」に参加しました。平和記念式典では、戦争を2度としてはいけないという決意が感じられました。日本以外の国からもたくさんの方が参加していて、平和を祈る人がたくさんいることが分かり、前向きな気持ちになりました。そして、夜の灯籠流しではたくさんの方の灯籠があり、いつまでも平和であることを祈る人が多いことを2日目は知りました。

3日目は平和記念式典に行き、たくさんの方の資料を見て今まで考えていた戦争よりも残酷であることが分かりました。僕はその資料の中にあつた1つのお弁当箱が心に残っています。そのお弁当箱は、お母さんが息子のために一生懸命作ったお弁当でした。そんなお弁当を持ち、楽しみに出かけて行ったのに、食べられずに被爆し亡くなってしまいました。そして、そのお弁当は灰と化しました。資料館にあつた遺品には、このような子供のものまであり、一瞬にして原子爆弾は無差別に命を奪った原子爆弾に恐怖をおぼえました。

今回の広島平和の旅での貴重な経験を通して、戦争の悲惨さだけでなくその悲惨さから、今ある平和の日々の尊さを学ぶことができました。この旅で学んだことを語り継ぎ、世界中の人々がいつまでも平和な日々を送れることを祈っています。

最後に貴重な経験をさせてくださった板橋区職員の方々、引率してくださった教職員の方々ありがとうございました。



# 広島から世界へ

上板橋第一中学校 8年 其部 優希

## 〈青少年平和の集い〉

今回は感染症対策のため PEACE CLUB のみなさんと 8 団体の小中高生が参加し「被爆者の思いを受け継ぐ方法」というテーマに沿って原爆のことがどうすれば風化されないかを話し合いました。そこでは「SNS などを利用し若い世代に知ってもらう」「他の都道府県にも PEACE CLUB を作りみんなに伝える」などの意見が出ました。被爆者体験証言では当時 7 歳で爆心地から 4.1 km 離れたところで被爆された山本玲子さんから当時の広島の様子や原爆の恐ろしさについてのお話をうかがいました。その時におっしゃっていた「戦争をしても何の意味もありません。どうか自分の命 人の命を大切にしてください。」この言葉を聞いてより一層原爆のことを他の人達にも知ってほしいと強く思いました。

## 〈平和記念式典・灯籠流し〉

被爆し亡くなられた方を慰霊する為にご遺族や諸外国の方、岸田総理大臣、広島県知事、広島市長、グテーレス国連事務総長など 2854 人の人が参列された式典では総理や知事の挨拶、実際に投下された時刻に一分間の黙祷、広島平和の歌を聞いたりしました。広島平和の歌では平和への願いや戦争が無い世界への願いなどが心に伝わってきました。夜の元安川に流された平和の思いがこもった灯籠は色とりどりでとてもきれいで 4000 個もの灯籠が流されていたことと、こんな沢山の人が平和の祈りを込めていることにとっても驚きました。自分やみんなが書いたメッセージが叶えばいいなと祈りながら見送りました。

## 〈平和記念資料館・献花〉

原爆死没者慰霊碑に白いお花を献花しました。その時に私は、「この悲惨な出来事を風化させないように後世に伝えていけるように頑張ります」と心に誓いながら献花しました。その後平和記念資料館に行き、たくさんの展示物を拝観しました。黒焦げになった衣服や瓦礫、私物、原爆投下後の広島の写真やそれをイメージした絵などがありました。どれも衝撃的で自分が知っていた原爆の恐ろしさを遥かに超えていました。原爆のことを決して忘れてはいけないということを改めて思いました

## 〈3 日間の経験を経て〉

今回の旅を通して、戦争の悲惨さと平和の有難さを実感しました。この旅で学んで来たことを学校の人・周りの人そして世界中の人達に教えられたらいいなと思いました。「自分も被爆者の思いを語り継ぐ」という使命を持ち、自分ができることを考え行動していきたいと思えます。

# 広島で学んだこと～平和の大切さ～

上板橋第三中学校 8年 糸井 遥斗

私は広島平和の旅で平和について様々なことを学びました。

〈広島青少年平和の集い〉

被爆者の話を実際に聞く体験をさせていただきました。

「原爆が落ちた時何もわからず逃げ回っていた。大きな太陽が落ちてきたと思った。左右に火の玉が動くと瓦が拭き飛んで行った。」という話を聞き「原爆」というものの威力が凄まじいということを改めて実感することができました。

また被爆者の方のお兄さんが「1キロ以上離れていたのにやけどした」など驚くことも多かったです。最後に「戦争は絶対いいことなんてない」と話していました。

〈平和記念式典〉

式典では様々な国の方が集まっていて世界の人が「平和」について考えていることを感じました。平和を望んでいる人が多くそれをわかっているはずなのに様々な国で戦争が起こっているということが悲しくなりました。世界でも「平和」ということが広まってほしいなと思いました。

〈平和記念資料館〉

平和記念資料館では原爆の熱風、熱線で曲がった三輪車や自転車、黒く炭になったお弁当、曲がって黒くなった水筒、破れて小さくなった服など日用品がこんなになるほど激しい熱さだったのだと思いました。他にも溶けて固まった古銭や瓦や瓶など余程熱くならないと溶けないようなものまでも溶けてしまうのだと思いました。また、全身が火傷した方の写真もありこのような被害を受けた人が多いと考えると、とても悲惨で悲しいことが原爆で起きたのだと思いました。

〈感想〉

今回の平和の旅で平和というものの喜びについて深く改めて学び、戦争というものがどれだけ悲惨で悲しいものか学ぶことが出来ました。

いま世界のどこかで大正～昭和の頃の日本の悲惨さがどこかで繰り返されていると考えると悲しく早く終わって欲しいと思いました。たとえ短い期間であっても世界の人が「戦争」というものに生活を脅かされずに生きていられるということが出来たらいいなと思いました。今回の旅で学んだことを忘れずに今後生きていこうと思います。被爆者の方も言っていた「戦争は絶対にいいことなんてない」と言っていたことを忘れないようにします。

# 願い・思い

赤塚第一中学校 8年 村井 初

77年前の8月6日、広島に投下された一発の原子爆弾「リトルボーイ」によって多くの  
人々の未来が歪められていった。

## 【原爆ドーム】

緑の草原のような場所の真ん中に原爆ドームは 77 年の物々しい空気をまとい建って  
いた。周りのビルよりも古く小さいのにも関わらず大きな存在感をもっていた。私には、  
原爆ドームは戦争の理不尽さや原爆の恐ろしさを静かに物語っているように思えた。

## 【灯籠流し】

私たちが書いた灯籠は「折鶴再生紙」と呼ばれるものからできていた。折鶴、つまり多  
くの人が折った千羽鶴から作られた紙のことだ。

人々が平和を願って折った千羽鶴、そこから作られた色とりどりの灯籠に様々な言語で  
書かれた平和への願い。たくさんの願いや思いをのせて流れていく灯籠は儂いながらも美  
しく輝いていた。

## 【平和記念資料館】

薄暗い部屋の中には多くの被爆者の苦労や生き様があった。原爆による怪我や後遺症に  
よって大きく人生を変えられた人々の証言が数多くあった。とても静かな館内は時間を忘  
れるぐらい悲惨な現実を示していた。そして残された人々の覚悟によって寄贈された実物  
展示の品で埋め尽くされていた。

明るい部屋の中には原爆が開発された理由や原爆による被害・威力についてや、ヒロシ  
マがきれいな街に復興するまでの歴史などの解説展示が多くあった。

## 【感想】

人々の強い想いや苦労によってヒロシマは復興し、今のきれいな街になっていったこと  
が今回の旅でよくわかった。戦争によって被害を受けたのは日本だけではない。日本は被  
害者であるかもしれないが同時に加害者でもある。そのようなことを踏まえてこれから先、  
戦争や核の恐ろしさについて考え伝えていきたいと思った。

## 【最後に】

貴重な体験をさせていただいたことを嬉しく思うとともに、コロナ禍であったにもかか  
わらず広島に行かせてくださった板橋区の職員の方々や学校の先生方そして家族に心から  
感謝申し上げます。ありがとうございました。



# 「ヒロシマ」を伝える

赤塚第三中学校 8年 小向 日向

77年前の8月6日、広島に一発の原子爆弾が投下され、広島は熱線と爆風で破壊されました。多くの尊い命が奪われ、今でも放射線による後遺症で苦しんでいる人がいます。私たちは被爆者の思いと被爆の実相を多くの人に伝え、平和の尊さを訴えていきます。

1日目は、「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加して、被爆体験者の山本玲子さんにお話をお聞きしました。小学校一年生の時、爆心地から4.1km離れた学校の校庭で被爆した方です。山本さんは、当時の学校での生活を詳しくお話してくださいました。お話を聞いていると、今の生活がどれだけ幸せなのか痛感し、原爆や戦争の恐ろしさをより身近に感じることができました。お話の後は、他地区の生徒と「被爆者の思いを受け継ぐ方法」をテーマにグループディスカッションを行いました。私たちのグループでは、「被爆者の思いを書いたものを様々な人が手に取りやすい形にする」「SNSで発信する」という意見が出ました。このようにすれば若い世代の人も、もっと身近に原爆の事を知ることができると思います。

2日目の「平和記念式典」では、広島市長の「一刻も早くすべての核のボタンを無用のものにしないでください」という言葉が心に残っています。現在、核兵器の数は13080発で、そのうち3825発がすぐに使えるように準備されています。これは、被爆者の思いとこれまでの活動に背く行為です。今、核兵器が使用されたら世界はどうなってしまうのか、私たちは考えなければいけません。

3日目は、平和記念資料館の見学を行いました。多くの亡くなった子どもたちの遺品を見て当時の状況を想像すると、心が痛みました。展示されている遺品のそれぞれに、寄贈した人の思いを近くで感じることができました。また、資料館には被爆した方の写真が多くありました。その写真を見ていると、思わず涙が出てきそうになりました。これだけ沢山の人の夢や希望を奪った核を世界に存在させてはいけなくと強く思いました。

この3日間を通して、原爆の恐ろしさと戦争の悲惨さ、平和と命の尊さについて深く考えることができました。現在、被爆者の平均年齢は84歳を超え、当時の状況を知っている方は少なくなっています。一人ひとりが、被爆者に代わって、核兵器の愚かさと平和の尊さを考えていけば、世界が目指す恒久平和につながるはずですが、今回の貴重な体験を一人でも多くの人に伝えていき、被爆者の願いが広がっていくことを強く望みます。

# 平和記念資料館

高島第二中学校 8年 黒田 彩水

私の祖母は長崎の原爆での被爆者なので、小さい頃から原爆のことは少しだけ知っていました。もっと深く原爆・核兵器の悲惨さや恐ろしさについて学びたいと思い、私はこの旅に参加したいと思いました。そして私はこの旅でたくさん学ぶことができました。

旅のなかで平和記念資料館へ見学に行きました。資料館には、たくさんの原爆投下後の写真、絵や実物資料などがありました。それを通じて改めて原爆の恐ろしさや悲惨さというものを感じることができました。私が特に印象に残っていることは2つあります。

1つ目は、被爆前と被爆後の広島街の写真です。広島街が原子爆弾一発でこんなにも破壊されてしまうことに衝撃を受けました。特に原爆ドームは、もともとは立派な建物だったのに、爆風により曲がった鉄骨部分や崩れ落ちたレンガだけが残っていて、あまりにも変わり果てた姿に言葉を失いました。核兵器によって広島街がこんなにも変わってしまい、たくさんの人々が亡くなってしまいました。

2つ目は、被爆当時を振り返った絵です。被爆後、水を求めて川に飛び込む人や火傷で体が焼きただれた人の絵など、たくさんの原爆の恐ろしさを絵で表していて、まるで当時の場所で見ているようでとても怖かったです。私のそばで絵を見ていた女性は、そのあまりにも恐ろしい絵を見て倒れてしまっていました。それほど原爆は悲惨なものなのです。

77年前の8月6日、8時15分、一発の原子爆弾で9万人以上もの尊い命が一瞬にして奪われ、多くの悲しみを生みました。命が助かった人達は、たくさんの困難を乗り越えながら、原爆について語り継いでくれています。私にとって被爆体験者の話を直接聞いたことは貴重な体験でした。これから私ができることは、原爆の恐ろしさや平和への願いを受け継ぎ、伝えていくことが大切だと思いました。

この世界には、まだまだ核兵器を所有している国がたくさんあります。本当に核兵器を廃絶するために、世界中の人が広島・長崎の悲劇を知ってほしいと思いました。